

AI が著者の伝えたい内容を解説

ロスプリベンションへの道 4 協働防犯 (22)

和らぎをもって聲なきに聞き、形無きに見る大和魂

JEAS 会員の熊検知・サイバー最前線・来場者満足の分析

セキュリティ産業新聞 2025 年 12 月 25 日号掲載

① 見抜く力（探索の眼）は、誠意・感謝・礼節という“和らぎ”から生まれる平易に言うと

「相手を大切にする気持ちで接していると、ふだん見落としがちな小さなサインに気づける」ということです。

なぜ“和らぎ”が「見抜く力」につながるの？

人って、心が“尖っている状態”（疑い・焦り・敵対）だと、見えるものも狭くなります。逆に、

- * 相手を尊重する
- * 感謝を持つ
- * 礼儀正しく接する

こういう姿勢（＝著者が言う“和らぎ”）だと、相手の反応が返ってきやすいし、場の空気の変化にも敏感になります。

文章の中の具体例

冒頭の「誰もいないと思った庭に、あいさつしたら返事があった」エピソードが象徴です。著者は「見えないはずの人影に気づけた」ことを、単なる偶然ではなく、先に礼を尽くした（あいさつした）／感謝の気持ちがあったという“心の置き方”と結びつけています。

防犯の場面に置き換えると

- * 店舗や現場で「違和感」に気づく人は、だいたい周囲との関係が良い（声がけできる、相談される）
- * 逆に、冷たく当たると、周りが黙る → 情報が入らない → “声なき声”が拾えない

だから著者は、「見抜く力」は特殊能力ではなく、日頃の誠意・感謝・礼節の積み重ねで育つと言っているのだと思います。

② 防犯／ロス対策は“悪を探す”だけでなく“善を見つけ支える”ことでもある
平易に言うと

防犯というと「怪しい人を見つける」「悪いことを止める」になりがちだけれど、著者はそれだけでは足りない、と言っています。

「善い行いをする人、助けが必要な人を見つけて支えるのも、防犯の大事な仕事」という考え方です。

どうして“善人を探す”ことが防犯になるの？

理由はシンプルで、良い人・良い行動が増える環境は、悪い行動が入り込みにくいからです。

例えば…

- * 丁寧な接客・声がけが多い店 → 万引きが起きにくい
- * 互いに気づかいがある職場 → ルール違反が起きにくい
- * 困っている人を放置しない → “犯罪に向かう前”に止められる

つまり、「悪を叩く」だけだと、現場がギスギスして逆効果になり得る。

それより、善を増やし、支え合いの空気を作ることが、結果として抑止力になるという発想です。

文章の根拠（著者が強調している点）

著者は『警察手眼』の前段として、

「悪人を探すのと同じくらい、善人を探し出し支援する誠意が必要」という趣旨を引いています。ここが②の中心です。

③ 技術（AI・サイバー・分析）は重要だが、それを生かすのは人の心構えと協働の姿勢
平易に言うと

「AI カメラやサイバー対策は強い道具。でも、道具は“使い方”と“使う人たちの連携”がないと役に立たない」

ということです。

技術だけではうまくいかない理由（現場あるある）

技術は「導入」より「運用」で差が出ます。たとえば…

- * AI 検知：アラートが鳴る → 誰が見る？誰が判断？誰が動く？（役割が曖昧だと放置される）

- * サイバー対策：仕組みがあっても、現場が守らない（パスワード共有、USB 持ち込み等）

- * データ分析：分析結果が出ても、現場が納得しないと行動が変わらない

だから著者は、技術の紹介（熊検知、サイバー、分析など）をしつつも、最後は「和らぎ」「協働」「研鑽」に着地させています。

つまり主役は技術ではなく、**人の姿勢と、関係者が一緒に回す力（協働）**です。

“協働”が鍵になる理由

防犯・ロス対策は、単独の部署だけでは完結しません。

店舗、警備、IT、教育、運営、外部ベンダー…が関わるので、

- * 情報共有

- * 相互理解

- * 連携ルール

がないと、技術は“点”で終わります。

著者が「和らぎ」を強調するのは、**協働を成立させる土台が“人への誠意・礼節”**だと考えているからだと思います。

3 点を一文でつなぐと（超平易まとめ）

「人を大切にする姿勢（和らぎ）があると、見えにくいサインに気づける。防犯は悪を疑うだけでなく善を増やして支えること。技術は大事だが、それを活かすのは人の心構えと協力体制だ」

——これが著者のいちばん伝えたい核だと読めます。